目からウロコの医学常識 ウソ！ホント？ その②

肺炎にワクチンがある？

中田クリニック院長・順天堂大学医学部呼吸器内科客員教授
中田紘一郎

最近、急増している「肺炎」による死亡。がん、心疾患、脳血管疾患に次いで第4位となっている。だが、肺炎に効くワクチンがあるとなれば、接種しないのは愚かというもの。高齢者の多い養護施設などでは接種を義務化するべきだ、と中田紘一郎先生は主張する。

急増している肺炎による死亡

「戦前は肺炎が死因の第1位を占めていました。その後、ペニシリンなどの開発で死亡率は下がってきたのですが、現在も死因の一つであることは変わりません。しかも最近、肺炎による死亡者が確実に増えているんです（139ページ・図1）」

順天堂大学医学部呼吸器内科客員教授で内幸町の中田クリニック院長の中田紘一郎先生は警鐘を鳴らす。日本の65歳以上の高齢者は人口10万人に対して5215人もの人が肺炎で亡くなっている割合になる（139ページ・図2）。

簡単な風邪、インフルエンザだと思っていたらいつまでも咳が止まらず、しまいには呼吸がゼイゼイというようになって、ついには呼吸困難になる。人工呼吸器を着けても肺胞の炎症が治まらなければ、酸素不足になって最後は命を落とすことになる、ほんとうに恐ろしい病気が肺炎である。しかも最近はペニシリン耐性のある病原菌も広まっていて、従来の抗生物質を服用しても効果がはかばかしくないケースも増加している。

肺炎は、下手をすると命取りになりかねない病気だ。

効果は5年持続 1回7000円から

「でも、肺炎に効く〝ワクチン〟があるんです」

と、中田先生。肺炎球菌ワクチンは20年以上前に開発されていた。「1回接種すると効果は5年持続します。ただ、まだ、健康保健の適用が認められていないので——料金は医療機関によって異なりますが——1回の接種で7000円から1万円程度かかります」

だが、1年にならせば2000円にしかならない。肺炎で死ぬことを考えれば安いものだ。

世界的に権威を認められている医学雑誌『ランセット』に2001年に掲載された論文がある。ストックホルムの26万人を対象に行なわれた肺炎球菌ワクチンの効果を検証する実験だ。10万人にワクチンを接種、16万人には接種しなかったところ、肺炎による入院率は前者が後者より36％少なく、同じく肺炎による死亡率は57％減少したという結果が出ている。

このように、肺炎球菌ワクチンの効果は欧米では広く認められており、65歳以上の高齢者に接種を義務付けている国も少なくない。だが日本では肺炎に効くワクチンがあるということすら知らない医師がまだまだ多いのが現状だ。

NHKの番組出演で増えたワクチン接種

中田先生によると、実は、1994年ころから肺炎による高齢者の死亡が増えてきた。それは、高齢者の増加と小学生に義務化されていたインフルエンザワクチンの接種が中止されたことと軌を一にしている。子どもがひいてきたインフルエンザが原因で高齢者が肺炎をおこし、死亡しているのだろうと、先生は注意を促し、肺炎球菌ワクチンの接種を呼びかけてきた。2002年にはNHK「今日の健康」に出演、ワクチンの重要性について説明している。そのためか、2000年までは年間4000本程度だった出荷量＝接種量は、2002年度には16万本に達している。だが、それでも日本の高齢者人口に比べれば微々たるものだ（139ページ・図4）。

体内にいつもある肺炎球菌が肺炎の原因

「空気中のウイルスなどの病原性微生物が体内に入り込むと、抵抗力の弱っている人は風邪をひきます。鼻水が出たり、喉が腫れたり熱が出たりする。このようにウイルスが原因でかかる病気を風邪と呼んでいます」

ウイルスによるダメージを受けた気道は、二次的に細菌感染を起こしやすくなる。炎症が気管にまで広がると、気管支炎となって、咳が出たり痰がからまったりする。これをこじらせて、炎症が肺のいちばん奥にある肺胞にまで及んでしまうと、肺炎になるわけだ。

肺胞は酸素を血液中に取り入れ、二酸化炭素を排泄する大切な器官、呼吸の要である。これが不可逆性の機能不全に陥れば、人間は死ぬ。まさに、風邪は万病のもと、にほかならない。

風邪の9割くらいはウイルスによるものだ。一方で、肺炎は体内にいつもある常在菌の肺炎球菌によって引き起されることが多い（139ページ・図3）。普段は免疫などで活動を抑制されている肺炎球菌が、風邪などをひいて体力が落ちたときに肺炎を発症する。気道から菌を排除する力が落ちるために、二次感染によって細菌性の肺炎を併発してしまうのだ。だから、糖尿病や慢性の心臓疾患、慢性肺疾患などのある人、慢性腎不全などで免疫能が落ちている人は特に注意が必要になる。こうした肺炎球菌に効くのが、肺炎球菌ワクチンなのだ。

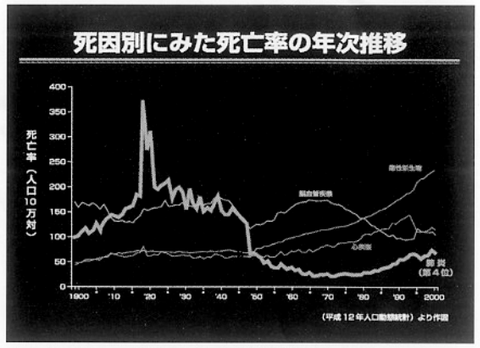
5年間持続する肺炎球菌ワクチン

「肺炎球菌ワクチンを接種しておけば、インフルエンザにかかったことで併発するおそれのある肺炎の発症を抑えることもできます。また、たとえ肺炎になっても軽くすませることを期待できるのです」

肺炎球菌ワクチンの効果は5年間持続する。だから、行政の経済的支援があれば、もっと普及するにちがいない。それがひいては医療費の抑制につながるのだ。

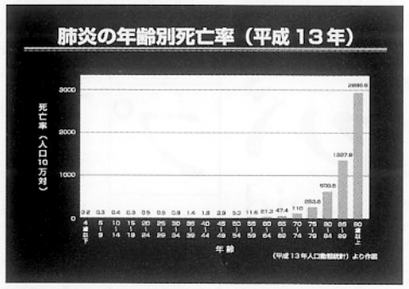
インフルエンザワクチンと肺炎球菌ワクチンを接種しておけば、肺炎の予防に効果がある。ただし両者を接種するときは2週間以上の間隔をおく必要がある。

図1　肺炎の死亡率は第4位で、増えている



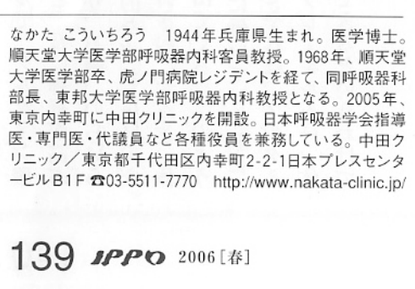
2000年の数値で、第1位が「悪性新生物」つまりがん。2位が「心疾患」、心臓の病気。第3位が「脳血管疾患」、脳溢血や脳梗塞など。そして4位が肺炎である。人口10万人に対して、肺炎による死者は70人に迫る勢いを示している。（平成12年人口動態統計）より作図。

図2　高齢者は肺炎による死亡率が高い



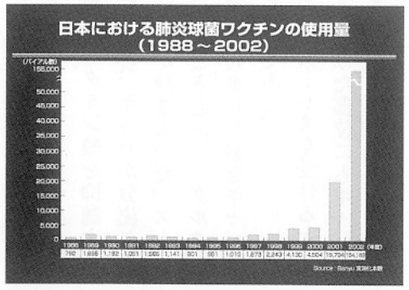
高齢者の死因で、肺炎が占める割合の大きいことが分かる。若い人で肺炎による死者がほとんどいないのは、体力があって回復する率が高いためだ。高齢者は肺炎に十分に注意しなければならない。（平成13年人口動態統計）より作図。

図3　肺炎の原因は肺炎球菌が多い



1994年4月から1999年6月までの調査で、肺炎球菌が分離されたのは24％にのぼる。ほぼ4分の1がこの病原菌によって引き起された肺炎だと考えられる（複数病原体検出例も含む）。60歳以上の肺炎の場合は46％が肺炎球菌によるものだという調査（石田直、2000年）もある。（石田直：化学療法の領域16（6）：1023、2000）より作図。

図4　肺炎球菌ワクチンの使用量は増えているが……



1988年から2002年までの統計。肺炎球菌ワクチンは1988年に開発されたが、2000年まではほとんど接種されていなかった。中田先生がテレビに出演してワクチンの話をした2002年に15万4189本と急増しているのが目立つ。（Banyu実消化本数）より。

なかた こういちろう　1944年兵庫県生まれ。医学博士。順天堂大学医学部呼吸器内科客員教授。1968年、順天堂大学医学部卒、虎ノ門病院レジデントを経て、同呼吸器科部長、東邦大学医学部呼吸器内科教授となる。2005年、東京内幸町に中田クリニックを開設。日本呼吸器学会指導医・専門医・代議員など各種役員を兼務している。中田クリニック／東京都千代田区内幸町2-2-1日本プレスセンタービルB1F ☎03-5511-7770　http://www.nakata-clinic.jp/